

Contents

- 1) 学会からのお知らせ
- 2) 健康心理学コラム vol. 77 「初任期教員のメンタルヘルス」 東條 光彦 (岡山大学)

康心

1) 学会からのお知らせ

■ 日本健康心理学会第32回大会開催のお知らせ

日本健康心理学会第32回大会は、2019年9月28日、29日の両日、日本健康心理学会の主催、久留米大学の運営(準備委員長：津田 彰)、帝京科学大学の協賛により開催させていただくことになりました。また、大会のテーマを、会場となる帝京科学大学の理念に倣い、「いのちを「つなぎ」「ささえ」「はぐくむ」健康心理学」としました。「人生100年時代」における私たち一人一人の新たな生き方と持続可能な健康ケアの在り方について、皆様と一緒に考える契機になれば幸いです。多くの方々のご参加を、お待ちしております。

[日本健康心理学会第32回大会ウェブサイト]
<http://www.jahp32.com/index.html>

理学の側面から行っていきたいというのがここしばらくの望みである。

日本健康心理学会広報委員会

<http://jahp-public.blogspot.jp/>

メールマガジンの配信停止、アドレス変更は下記アドレスまで

日本健康心理学会事務局 <jahp-post@bunken.co.jp>

メールマガジンへのご意見・ご感想は下記アドレスまで

広報委員会 <jahp-ML@bunken.co.jp>

過去のメールマガジンは、こちらからご覧いただけます

<http://jahp.wdc-jp.com/health/health1.html>

2) 健康心理学コラム Vol. 77

「初任期教員のメンタルヘルス」

東條 光彦 (岡山大学)

少し前まで教員養成学部在籍していたので、卒業生の中には教員になっている者が少なくない。それが卒業後数年して研究室を訪ねてくると、いかにも先生の顔つきになっている。彼らのような新卒の教員はどのように仕事に馴染んでいくのだろうか、というのが表題の研究に手を染めた発端だった。もう一つの発端は、近所の小学校。かなり早く前を通っても、帰宅時間が遅くなったときでも職員室の電気はついている。「先生たちは疲れないのかな」という素朴な疑問が湧いた。件の卒業生に尋ねると、とにかく初任のころはきつかったと言う。

当方教育学者ではなし、臨床現場ではどちらかというとまくいっていない方たちのお話を聴く仕事をしている。そこで、先生たちのこの「きつさ」を探ってみようということで、まずは初任教員の疲労感を学期ごとに調査してみることにした。疲労感に影響するのは当然勤務時間や睡眠時間、それに対人援助職で燃えつき重要な要因とも考えられている感情労働、それと確かめたいのは疲労「感」なので、状況や自己に対する認知的評価といった変数を想定し、各学期1回ずつ経時的に調査を行ってみる。というのが、数年前にこのテーマに手をつけた当初のデザインだった。その後、「きつさ」を仕事への前向きな気持ちに変えたり、認知的評価部分に現場に出たときのリアリティーショックを加えたりといった改編を加えながら令和を迎えた今年5年目に入っている。この間、量的調査にとどまらず、聞き取り調査データにテキストマイニングによる分析を行ったりしつつ継続している。

学校は「ブラック化」したと言われる。教員採用試験の倍率低下が報じられ、一部自治体では「危険水域」になっているという。にもかかわらず教員を志した若い先生たちのバックアップを、健